

# 学生相談に対する援助要請行動および 心理的問題が対人印象に及ぼす影響

——援助者の違いおよび進路面の問題との比較——

木 村 真 人

## 問題と目的

近年、学生相談活動をサービスとして捉える視点が重視されている（高野・宇留田，2002）。その場合、ただサービスを提供するだけでなく、そのサービスをよりよく学生に利用してもらう工夫が必要となるだろう。つまり、金沢・山賀（1998）が指摘するように、学生の立場に立ったサービスの提供が求められている。学生が学生相談サービスをどのようにどの様に捉え、またどのように利用するのかを明らかにすることは、サービスを利用する側の学生の視点による学生援助サービスのシステム構築につながると考えられ、このような観点からの研究が近年増加している（木村・水野，2004；高野・宇留田，2004；宮崎他，2004）。

このような、他者に援助を求める行動や意識は援助要請行動や被援助志向性という概念で研究が進められている（水野・石隈，1999）。これまでに、援助要請行動や被援助志向性に関連する要因としてさまざまな変数が指摘されている。その中で、心理療法やカウンセリングなどの専門的な援助を求める際に、スティグマ・汚名を着せられることへの心配が援助要請行動を抑制することが指摘されている（Deane & Chamberlain, 1994）。

では、学生相談を利用することは実際にスティグマや汚名に結びつくのであろうか。スティグマを着せられることへの心配は、援助を求める側が感じるものであるが、スティグマが存在するのならばそのスティグマを払拭するアプローチが必要であり、そうすることで学生相談からの援助サービスを利用しやすくなると考えられる。反対に、スティグマが存在しないのであれば、学生相談に援助を求める際の汚名への心配は客観的な事実に基づかない心配となり、過度の心配が援助要請行動を抑制していると言える。

この点を検討した研究としてBen-Porath（2002）が上げられる。Ben-Porath（2002）は専門家に対する援助要請行動へのスティグマや汚名が心理的な問題を抱えていることによるものなのか、あるいは専門的な援助を受けていることによるものなのかを区別して検討する必要があるとし研究を行っている。問題の種類（心理的問題・身体的問題）と援助要請行動（専門的な援助を求めたか、求めないか）を組み合わせた4種類のシナリオを作成しそれぞれの人物についてパーソナリティを評価させた。その結果、心理的問題を抱えている方が身体的問題を抱えているよりも情緒的に不安定であると評価され、さらに心理的問題で専門的な援助を受けた人の方が援助を受けなかった人よりも情緒的に不安定であると評価され、心理的な問題を抱えていることに加えて専門家に対する援助要請行動が否定的な評価に結びつくことと報告している。

木村（2004）は大学生の学生相談に対する援助要請行動に焦点をあて、学生相談を利用することへのスティグマが学生相談を利用することによるのか、または、抱えている問題によるのかを対人印象の視点から検討している。その結果、心理面の問題を抱えている人物の方が学業面の問題を抱

えているよりも否定的な印象で評価され、また学生相談への援助要請行動については利用した人物の方がしない人物よりも「意欲的」と肯定的に評価される面があると報告している。しかし、援助要請行動の対象は学生相談のみであり、友人や家族といった専門家でない援助者への援助要請行動との比較はなされていない。

そこで本研究では、大学生を対象に援助要請行動が対人印象に与える影響について、援助要請行動の対象として専門的な援助者である学生相談と、非専門的な援助者である友人、家族、大学の先生をとりあげ、援助を求める対象の違いに焦点をあてて検討する。また抱える問題が対人印象に与える影響についても心理面と進路面の問題を取り上げ検討する。

仮説は以下のとおりである。

仮説1：心理面の問題を抱えているほうが、進路面の問題を抱えているよりもネガティブな印象で評定される。

仮説2：学生相談に援助要請した場合は、他の援助者に援助要請した場合、および援助要請をしなかった場合よりもネガティブな印象で評価される。

## 方 法

### 1. シナリオの作成

4年制の大学に在籍する男子大学生が登場するシナリオを作成した。シナリオは援助要請行動（学生相談、家族、友達、大学の先生、援助要請行動なし）と抱える問題の種類（心理面：抑うつ、進路面：進路・将来について）を組み合わせた10種類が作成された（Table 1）。

### 2. 質問紙の構成

**基本的属性：**基本的属性として性別と年齢を尋ねた。

**シナリオ：**各質問紙には上記の10種類のシナリオのうち1つのシナリオが取り上げられた。

**対人印象：**シナリオの人物に対する印象を測定するために、林（1978）によって作成された特性形容詞尺度を用いた。「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性（力本性）」の3因子から構成される、7件法、20項目の形容詞対からなる尺度である。

### 3. 実験参加者

大学生248名を対象に大学の講義の時間を利用し、集団形式で質問紙を用いた実験が実施された。記入漏れのある回答票を除いた237名（男性103名、女性132名、不明2名）が分析対象となった。平均年齢は19.23歳（SD=1.60）であった。

### 4. 実験方法

実験参加者に、ランダムに10種類の質問紙のうちの1種類を配布した。そしてシナリオを読み、その人物の印象について評定を求めた。各シナリオには20～27名の実験参加者が割り振られた。

Table 1 シナリオの記述

太郎君は、4年制の大学に通う大学生です。大学ではサークルに所属し、学外ではアルバイトに励んでいます。また、太郎君は音楽を聴いたり、友達と一緒に時間を過ごすことが好きです。

〈問題の種類〉

- a. 心理面：1ヶ月前、太郎君は彼女と別れました。それから、太郎君は気持ちが落ち込み、なにもやる気がしません。大学に行く気持ちにもなれず、授業に出ても集中できません。また、食欲も減り、体重が落ちました。夜も眠れません。
- b. 進路面：1ヶ月前から、太郎君は大学卒業後の進路や将来に関することで悩んでいました。

〈援助要請行動〉

- a. 学生相談：そこで、太郎君は大学の学生相談室のカウンセラーにその悩みについて相談しました。
- b. 家族：そこで、太郎君は家族にその悩みについて相談しました。
- c. 友達：そこで、太郎君は大学の友達にその悩みについて相談しました。
- d. 大学の先生：そこで、太郎君は大学の先生にその悩みについて相談しました。
- e. 援助要請行動なし：太郎君はその悩みについて誰にも相談しませんでした。

Table 2 特性形容詞尺度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
17.無気力な—意欲的な	<b>.69</b>	.04	-.26	.55
18.自信のない—自信のある	<b>.68</b>	-.07	-.09	.48
12.沈んだ—うきうきした	<b>.61</b>	-.08	.22	.43
7.非社交的な—社交的な	.61	.19	-.10	.42
1.積極的な—消極的な	-.55	-.27	.10	.38
13.堂々とした—卑屈な	-.52	-.15	.43	.48
2.人のわるい—人のよい	.08	<b>.67</b>	-.17	.48
5.にくらしい—かわいらしい	.03	<b>.65</b>	-.21	.46
14.感じのわるい—感じのよい	.43	<b>.54</b>	-.34	.59
4.ひとなっごい—近づきたい	-.38	-.44	-.00	.34
20.不親切な—親切な	.13	.40	-.22	.22
6.心のひろい—心のせまい	-.28	-.36	-.03	.21
3.なまいきでない—なまいきな	.03	-.36	.31	.22
10.恥しらずの—恥ずかしがりの	-.15	.30	-.09	.12
19.気長な—短気な	-.06	-.24	.12	.08
9.軽率な—慎重な	-.14	.18	<b>-.56</b>	.37
15.分別のある—無分別な	-.34	-.15	<b>.56</b>	.45
16.親しみやすい—親しみにくい	-.35	-.34	<b>.44</b>	.44
11.重厚な—軽薄な	-.01	-.17	.40	.18
8.責任感のある—責任感のない	-.26	-.09	.35	.19
固有値	3.1	2.3	1.8	
寄与率 (%)	15.3	11.3	8.9	
累積寄与率 (%)	15.3	26.6	35.5	

## 結 果

### 1. 特性形容詞尺度の因子分析

特性形容詞尺度の因子構造を検討するために20項目について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。固有値1以上の基準を設け、因子の解釈の可能性も考慮して林（1978）で得られた3因子を抽出した（Table 2）。

第1因子は「無気力な—意欲的な」や「自信のない—自信のある」などの因子負荷量が高く『力本性（活動性）』因子とした。因子負荷量の高い上位3項目で尺度構成を行い、3項目の得点を合計して項目数で割ったものを、「力本性」得点とした。

第2因子は「人のわるい—人のよい」「にくらしい—かわいらしい」などの因子負荷量が高く『個人的親しみやすさ』因子と解釈し、力本性と同様の手続きで「個人的親しみやすさ」得点を算出した。

第3因子は「軽率な—慎重な」「分別のある—無分別な」などの因子負荷量が高く『社会的望ましさ』因子と解釈し、肯定的であるほど点数が高くなるよう必要に応じて項目得点を逆転させた上で、力本性と同様の手続きで「社会的望ましさ」得点を算出した。

### 2. 援助要請行動の対象者と抱える問題の種類が対人印象に及ぼす影響について

援助を求める対象と抱える問題の種類が対人印象に及ぼす影響を検討するために、援助要請行動（学生相談・家族・友達・大学の先生・援助要請行動なし）と抱える問題の種類（心理面・進路面）の2要因を独立変数、特性形容詞尺度の下位尺度得点を従属変数とした被験者間の5×2の2要因分散分析を実施した（Table 3）。その結果、「力本性」： $F(1, 227) = 123.36, p < .01$ 、「個人的親しみやすさ」： $F(1, 227) = 6.36, p < .05$ 、「社会的望ましさ」： $F(1, 227) = 15.34, p < .01$ 、心理面の問題を抱えている人物の方が進路面の問題を抱えている人物よりも否定的に評価され、仮説1が支持された。

また援助要請行動の対象者の主効果および交互作用は認められず、仮説2は支持されなかった。

Table 3 特性形容詞尺度得点の平均値と標準偏差、および分散分析結果

援助要請行動	学生相談			家族			友達			大学の先生			援助要請行動なし			主効果	相互作用	
	抱える問題	心理面	進路面	心理面	進路面	進路面	心理面	進路面	心理面	進路面	心理面	進路面	心理面	進路面	援助要請行動			問題の種類
		N=24	N=24	N=27	N=22	N=25	N=20	N=23	N=24	N=24	N=25	N=25	N=25	N=25				
1 「力本性」	3.32(0.96)	5.09(0.88)	4.74(0.69)	3.44(1.13)	4.91(0.75)	3.37(1.06)	4.57(1.08)	3.42(1.09)	4.23(0.95)	n.s.	心理<進路**	n.s.	心理<進路**	n.s.	心理<進路**			
2 「個人的親しみやすさ」	4.73(0.87)	4.90(0.90)	4.94(0.73)	4.80(0.79)	5.08(0.63)	4.60(0.78)	4.96(0.82)	4.51(1.20)	5.09(0.75)	n.s.	心理<進路*	n.s.	心理<進路*	n.s.	心理<進路*			
3 「社会的望ましさ」	4.18(0.68)	4.82(0.86)	4.53(0.79)	4.12(0.95)	4.69(0.78)	4.10(0.80)	4.48(0.84)	3.88(1.14)	4.33(0.75)	n.s.	心理<進路**	n.s.	心理<進路**	n.s.	心理<進路**			

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

## 考 察

本研究では、大学生を対象に援助要請行動が対人印象に及ぼす影響について、援助要請行動の対象として専門的な援助者である学生相談と、非専門的な援助者である友人、家族、大学の先生をとりあげ、援助を求める対象の違いに焦点をあてて検討した。その結果、仮説1が支持され、心理面の問題を抱えているほうが、進路面の問題を抱えているよりもネガティブな印象で評定されることが明らかとなった。一方、仮説2は支持されず、援助要請行動の対象によって対人印象に違いは認められなかった。以下に分析で得られた結果について考察していく。

まず仮説1の「心理面の問題を抱えているほうが、進路面の問題を抱えているよりもネガティブな印象で評定される」を検討した結果、特性形容詞尺度の「力本性」「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」のすべての因子において、心理的な問題を抱えている方が進路面の問題を抱えている場合よりもネガティブに評価され、仮説は支持された。この結果は、Ben-Porath (2002) の結果、および木村 (2004) の心理面の問題を抱えた場合のほうが学業面の問題を抱えた場合よりも「活動・外向性」の面でネガティブに評価されたという結果を支持するものである。

本研究では心理面の問題として「うつ」を取り上げたので、進路面の問題を抱えている場合と比べて「活動性」が低く評価されたのはうつ症状として妥当に評価されたと考えることもできるであろう。しかし「活動性」のみならず、「個人的親しみやすさ」と「社会的望ましさ」においても進路面の問題と比べて心理面の問題を抱えている方がネガティブに評価されたことから、心理的な問題を抱えていることがスティグマにつながることを示唆される。

仮説2については、援助を求める対象によって対人印象に有意な差は認められず、また援助を求める対象と抱える問題との交互作用も認められず、「学生相談に援助要請した場合は、他の援助者に援助要請した場合、および援助要請をしなかった場合よりもネガティブな印象で評価される」という仮説は支持されなかった。つまり、誰に援助を求めるかよりも、抱える問題が対人印象に影響を及ぼしているということである。このことから、学生自身が心理的な問題を抱えている人に対して否定的な印象を抱いているために、自分自身が心理的な問題を抱えた場合には、自身が感じているのと同じように他者からも否定的な印象を持たれるのではないかと汚名の心配を感じると考えられる。そのために、心理面の問題で他者に援助を求める際には汚名の心配が喚起され、援助要請行動が抑制されることにつ

ながるのではなからうか。

以上の点を踏まえると、まず第一に取り組むべき点としては、心理的な問題やメンタルヘルスについて、大学生の関心や認識を高める取り組みが必要であろう。心理的な問題を一人一人が自分自身の問題として捉え、そしてメンタルヘルスに関する正しい知識を身につけることで、心理的な問題を抱えている人に対する認識も変化していくと考えられる。その結果として自分自身が問題を抱えた際にも、汚名を着せられるのではないかという心配も少なく適切な他者への援助要請行動につながる事が期待される。大学での心理学に関連する講義は、より多くの学生に働きかけることができるという利点からも、このようなアプローチを取り入れることが有効な場であろう。すでにこのような実践が各大学でなされており（例えば池田他，2004），今後はその効果を検証しさらに有効性を高めていくために、メンタルヘルスに関する知識を高めるような心理教育的アプローチのプログラム開発とそのプログラム評価が望まれる。

また、本研究において大学生は心理的な問題と比べて進路面の問題を抱えている学生に対して肯定的に評価をしていたことから、学生自身が他者に援助を求める際にも心理面の問題と比べて進路面の問題の方が、感じる汚名の心配は低いことが予想される。そのように考えた場合、心理面の問題を抱えていて他者に援助を求めることができないでいる学生が、汚名の心配を感じる事が少ない進路面の問題で他者に援助やサポートを求めている可能性が考えられる。したがって、学生の進路面の問題をサポートする学内機関のスタッフは、学生が抱える心理面の問題にも配慮しつつ援助を行うことが重要であろう。この点については、今後のさらなる研究が待たれる。

## 付 記

本研究の一部は、日本心理臨床学会第24回大会において発表されたものである。

## 引用文献

- Ben-Porath, D. D. 2002 Stigmatization of individuals who receive psychotherapy: An interaction between help-seeking behavior and the presence of depression. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **21**, 400-413.
- Deane, F. P., & Chamberlain, K. 1994 Treatment fearfulness and distress as predictors of professional psychological help-seeking. *British Journal of Guidance and Counseling*, **22**, 207-217.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**25**, 233-247.
- 池田忠義・吉武清實・仁平義明・山中 亮・佐藤静香 2004 東北大学における学生支援としての予防教育 東北大学教育研究センター年報，**11**, 45-54.
- 金沢吉展・山賀邦子 1998 大学生のカウンセリング・サービスに対する学生のニーズとその構造—上智大学新入生を対象としたニーズサーベイの結果から— 学生相談研究，**19**, 33-44.
- 木村真人 2004 学生相談への援助要請行動および心理的問題が対人印象に及ぼす影響 日本学生相談学会第22回大会発表論文集，56-57.
- 木村真人・水野治久 2004 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究，**37**, 260-269.
- 宮崎圭子・益田良子・松原達哉 2004 学生相談室来室の規定要因に関する研究 学生相談研究，**24**, 259-268.
- 高野 明・宇留田麗 2002 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談 教育心理学研究，**50**, 113-125.
- 高野 明・宇留田麗 2004 学生相談活動に対する援助要請のしやすさについての具体的検討—援助要請に関する利益とコストの認知との関連から— 学生相談研究，**25**, 56-68.